

打ち消される典故

— 懷風藻の〈型〉 —

太田善之

ことで、漢文世界の聖なる世界を眼前の宴席と重ね合わせていくのが基本的な形である。

夢裏鈞天尚易浦 夢裏の鈞天は尚浦き易く、

松下清風信難斟 松下の清風は信に斟み難し。

(22紀古麻呂「望雪」)

今さら言うまでもなく『懷風藻』は全体の120首のうち六割強が侍宴詩である。侍宴詩の構成は、(一)主催者をたたえ催宴の時季を設定する部分。(二)宴席の事物の描写の部分。(三)作者の詠懐(讚美)の部分。と大きく三分される。その詠懐部には典故を持った表現が多く見られる。一例を示しておく。

翻知玄圃近 翻りて知る、玄圃の近きことを。

对翫入松風 对翫す、松に入る風。

(31藤原史「遊吉野」)

吉野での詩宴や、仙女である漆姫や柘媛の伝説を語り、吉野の風景を描いた後の句である。「かえつて玄圃が近いことを知った、いかにも神仙の住むらしい松風を賞翫することだ」の意である。この「玄圃」とは、後漢・張衡「東京賦」(『文選』卷三)の「右皖玄圃」の李善注に「懸圃在崑崙閭闔之中、玄与懸古字通」とあるように、神仙の住むという崑崙山中にある居所のことで、ここではそれを典故としながら、吉野が「玄圃」に近い神仙世界であることを示している。このように、典故を用いる

「夢裏鈞天」は、六朝宋・顔延之「宋郊祀歌二首」(『文選』卷二十七)の「広楽四陳」の李善注にある「史記曰、趙簡子病、寤寐曰『我与百神聽於鈞天広楽矣』」を典故とする表現で、趙簡子が夢で聴いたという天上の音楽を指す。眼前の宴席の樂のすばらしさを典故によって示している。また、「松下清風」は、『世説新語』言語に「劉尹云、人想王荆産佳、此想長松下当有清風耳」を踏まえた表現と思われ、王荆産のすぐれた人となりをとえた「松下清風」を用いることで、眼前の景物のすばらしさが汲み尽くせないほど豊かであることを示している。このように、典故を持つ語句をおくことで、眼前の世界をあたかも典故の世界であるかのように、言い換えれば、中国の一世界であるかのように作りあげるのである。これが典故という〈型〉の表現効果の最たるものであると言える。

一方、『懷風藻』には典故としてわざわざ中国の聖なる世界を引き合いに出しつつも、その不要を語る詩も数多く見られる。

群公倒載帰

群公倒に載せて帰る

彭沢宴誰論

彭沢の宴誰か論らはむ。

(4 大津皇子「春苑言宴」)

たとえば4詩には「彭沢の宴誰か論らはむ」とあるが、「彭沢」は、初唐・王勃の春日序にも「横琴对酒、陶潜彭沢之遊」と見られ、彭沢の役人になった陶淵明のことで、その宴席を典故としつつも、「誰か論らはむ」ということで、眼前の宴席が典故となる宴席を超えたすばらしさであると述べている。典故の世界の不要を語るのである。ここでの典故は、理想的存在としての大きさを前提としながらも、それゆえに眼前の宴席のすばらしさを語るために打ち消されるのである。次の詩がそれにあたりと考えられる。

安得王喬道

安んぞ王喬が道を得て、

控鶴入蓬瀛

鶴を控きて蓬瀛に入らむや。

(11 葛野王「遊龍門山」)

各得朝野趣

各朝野の趣を得たり。

莫論攀桂期

攀桂の期を論らふこと莫れ。

(13 中臣大島「山齋」)

今日良酔徳

今日良く徳に酔ひぬ。

誰言湛露恩

誰か言はむ湛露の恩。

(19 巨勢多益須「春日応詔」)

幸陪瀛洲趣

幸に瀛洲の趣に陪りつ。

誰論上林篇

誰か論はむ上林の篇。

(20 巨勢多益須「春日応詔」)

今日足忘徳
勿言唐帝民

今日徳を忘るるに足れり。
言ふこと勿れ唐帝の民。

(40 石川石足「春苑応詔」)

此地即方丈

此れの地は即ち方丈。

誰説桃源寶

誰か説はむ桃源の寶。

(45 中臣人足「遊吉野宮」)

玆時尺清素

玆の時尺く清素。

何用子雲玄

何ぞ用るむ子雲が玄。

(64 刀利宣令「賀五八年」)

此地仙靈宅

此れの地は仙靈の宅。

何須姑射倫

何ぞ須るむ姑射の倫。

(73 紀男人「扈從吉野宮」)

琴樽興未已

琴樽の興未だ已まず。

誰載習池車

誰か載せむ習池の車。

(75 百済和麻呂「初春於左僕射長王宅讌」)

幸陪濫吹席

幸に濫吹の席に陪りて、

還笑擊壤民

還りて笑ふ擊壤の民。

(78 守部大隅「侍宴」)

遨遊已得攀龍鳳

遨遊已に龍鳳に攀づること得たり、

大隱何用覓仙場

大隱何ぞ用ゐむ仙場を覓むことを。

(90 藤原宇合「秋日於左僕射長王宅宴」)

誰謂姑射嶺

誰か謂はむ姑射の嶺。

駐蹕望仙宮

蹕を駐む望仙宮。

(102 高向諸足「從駕吉野宮」)

已応螽斯微

已に螽斯の微に応へぬ。

何須顧太玄 何ぞ須るむ太玄を顧みむことを。

(107伊岐古麻呂「賀五八宴」)

一読してわかることは「誰言(論)」などとするところで、その典故を見せつつ、眼前の宴席のすばらしさを称揚していることである。その数は14例であり、『懷風藻』の侍宴詩の中でも無視できない表現形式であることがわかる。

13詩では、「山齋」に則った風物が語られ、そこに侍する各々が十分に「朝野の趣」を得たことが語られる。だからこそもはや「攀桂の期」などは不要であると述べている。「攀桂」とは、小島大系に指摘のあるように、隠士として山野に入ることを指す。これもまた、眼前の趣を讃めるべく、典故の世界が比較の対象とされ、打ち消されている。

19詩は、「今日良く徳に酔ひぬ。誰か言はむ湛露の恩」とあるが、「徳に酔ふ」とは、『詩経』大雅「既醉」の「既酔以酒、既飲以徳」を踏まえた表現で、天子の御宴で存分に天子の徳を味わったの意である。「湛露」とは『詩経』小雅「湛露」の「湛々露斯、匪陽不晡。厭厭夜飲、不醉無歸」を踏まえた表現で、天子の恩恵のたとえとなる。本藻にも当該詩のほかに2例見られる(43・55)、よく用いられる典故である。ここでも、その著名な典故を用いつつも、眼前の賞美のために打ち消されている。

『懷風藻』詩にしばしば見られるものについて、説明を加えれば、45「桃源の賓」がある。「桃源」は92にも見え、晋・陶淵明「桃花源記」を踏まえている。「桃源の賓」とは、そこに見られる仙境に遊ぶ賓客のことである。45詩では、その直前に「此れの地は即ち方丈」とある。「方丈」とは、中国で、東方海

上にあつて神仙が住むとされた伝説上の山で、この場がすでに神仙世界であると述べた句である。だからこそ、「誰か説はむ桃源の賓」と、典故を打ち消して、桃源郷を超えた神仙世界がここにあることを主題として提示している。

73・102には「姑射」が呼び出されつつ、打ち消されている。「姑射」は、「莊子」逍遙遊の「藐姑射之山有神人居焉」を踏まえた、仙人の住むという山。73・102詩は共に吉野宮に從駕した際の詩で、吉野を詠んだ詩に多く見られるように、吉野を神仙世界と見なす詩である。それを「此れの地は仙霊の宅」(73)、「蹕を駐む望仙宮」(102)とまとめ、さらに典故のある「姑射」の語を見せつつ「何ぞ須るむ」(73)、「誰か謂はむ」(102)と打ち消すことで、姑射山以上の神仙世界がここにあると語る。

これら14例を、不要とされているものごとに分類すれば、以下のようになる。

- a 神仙閼連……11・45・64・73・90・102・107
- b 中国の聖代……19・40・78
- c 中国の宴席……4・20・75
- d 山中での遊び(官吏登用試験)……13

このように、『懷風藻』には、典故の世界を打ち消すためにあえて典故を用いた例が定着している。語義矛盾のようだが、「打ち消される典故」とでも呼ぶべきであろうか。これは、中国との彼我で考えれば、こちら側の優位を語るスタイルであると言えよう。中国の典故の世界を超えたものとして我が朝の事跡を位置付けているのである。

二

先に見た、典故を打ち消す詠懷部は、各詩の内部において、どのような整合性を持つのであろうか。

各詩の宴席の描写部を並べてみる。

これらのいくつかには、「鳥」が見られ（4「哢鳥」・20「繡翼」・40「戲鳥」・45「鳥」）、「魚」が対になるものもある（20「錦鱗」・45「魚」）。この「鳥—魚」の対は、『文選』公讌詩の初めにおかれた魏・曹植の詩に見え、実在した小動物であるよりは「祝祭的な雰囲気を作り出すのにふさわしい」景物としておかれているとされる⁵⁾。

また、「苔水—霞峰」（4）、「雲岸—霧浦」（13）、「山—水」（19）、「登望—降臨」（20）、「瑤地—禁苑」（40）、「清—岳」（64）、「峰巖—泉石」（73）、「雪嶺—氷津」（78）の山水の対はほかの懷風藻詩にも見られる基本的な形であり、この詠懷部を導く根拠としての蓋然性は低いと言える。また、宴席の場にあられた音（声）の描写（4「驚波共弦響、哢鳥與風聞」、13「寒猿嘯、柸声」、19「松風催雅曲、鶯哢添談論」、20「糸竹」、40「歌声」、45「風波転入曲」、102「弹琴、柸歌」）も宴席における楽や歌と、自然音が調和した姿として示されているが、これも待宴詩全般に見られる特徴である。要するに、これらの詩の描写部は、漢詩一般に見られるものであって、さしたる特徴はないのである。したがって、これらの描写部は、先に挙げた特殊な詠懷部を支える根拠とはなりえていないように見える。しかし、これらの詩の描写部の平凡さと類型性とは、漢詩世界への親和と所属を明

確に示している。このことこそが、続く詠懷部の根拠なのではないか。漢化された景物の描写部があるからこそ、続く詠懷部も、たとえそれがどんなに特殊であろうとも、漢詩世界への所属を示しうるといふように。このような逆立の構造のなかに、描写部は詠懷部を支えている。考えてみれば、「典故」とは、漢詩世界の最も規範的なルールである。それをういた詠懷部もまた、漢詩世界への親和と所属を示している。ところが、懷風藻の詩人たちは、そのルールに則り、漢詩世界への親和と所属を示しつつも、眼前の宴席を讃めるといふ主題のために、あえてそれを打ち消すというアクロバチックな世界を作った。類型的な描写部のあることで、かえって詠懷部の特殊さが浮き上がってくる。

三

このような、典故として聖なる世界を引き合いに出しつつ打ち消す詩は、中国においてあるのだろうか。あらかじめ結論めいたものを述べておけば、全くないわけではないが極めて少なく、偏りがある、と言えそうである。以下、不十分な検討ながらも、確認していく。

まず、懷風藻詩に大きな影響を与えている『文選』「公讌」（卷二十）を見ていく。魏・曹植をはじめとして梁・沈約までの14首が載せられている。その中で、聖なる世界を引き合いに出しつつそれを超える眼前の世界を描いたものには、六朝宋・顔延之「皇太子釈奠会作詩」が挙げられる。

倫周伍漢 周に倫べ漢に伍ぶるも、

超哉逸猗 超として、逸かに猗し。

かつて周の文王は太子としてよく輔佐したが、儒教の師に導かれた今の宋の太子もそれを受け継ぐに足る聡明さで、遙かな周の聖代を今に現すことができる。厳かにおこなわれた積奠の儀の後、盛大に宴がおこなわれ、人々はそれを見ようと集まってくる。

その様に続いて語られるのが、先の引用部で、今の時代が周や漢という古の聖代と比べて、はるかにまさっているというのである。本詩は、続けて、太陽が万物を照らし、その恵みを受けるように太子の有徳の様を述べつつ、自らが不才なまま高位にあることを恥じて結ぶ。うたい収めの不才を恥じる箇所はよく見られる詩の末尾だが、周や漢といった聖なる時代を話題にしつつも、現在のほうがすばらしいとするのは「公譙」詩においてこの一首である。

ただ、同じ顔延之の「応詔謠曲水作詩」にも、次の句がある。

仁固開周 仁は固くして周を開き

義高登漢。 義は高くして漢に登る。

祚融世哲 祚は世哲よりも融く

業光列聖 業は列聖よりも光く。

六朝の宋は道に従って晋を継いだ（道隱未形、治彰既乱）。したがって、三皇五帝の如き治世となっている（帝迹懸衡、皇流共貫）。だから宋の治世は長く久しい（惟王創物、永錫洪算）。

ここに続けて、先の詩句がある。この「仁」「義」は、宋の「仁」「義」を指し、それを周や漢と重ね合わせている。「その福德や徳業は、代々の聖哲なる王（天子）よりもまさりかがやく」（新

釈漢文大系による）のである。新釈漢文大系では、このように「よりも」と訓んでいて、宋の文帝の行いが古の聖天子たちよりも上であると解釈している。先の釈奠詩と同想であれば正しいが、この詩の中では直前の周や漢と重ねたことから考えて、「世哲に融く」「列聖に光く」と訓んで、周や漢と等しいと理解したほうがよいように思う。

「公譙」の初めに置かれ、後の宴詩の基本とされた曹植ら建安の詩人たちの詩は、客としてその宴席をことほぐ中に、祝意を含んだ景物を見いだしていたとされる。ところが、晋・陸機らによる四言詩は主人よりも晋という王朝そのものをたたえる形が目立ち、その讚美の表現も、具体的な景物に頼らないものであった。今見た顔延之の詩も全体の趣としては晋代の詩に似ていて、やや抽象的な讚辞が多い。その中に、一首だけが、歴代の聖朝を引き合いに出しつつ現在のほうが優れていると詠んでいる。これは、南北に王朝が分かれたことに起因するかとも思われる。

また、「懷風藻」詩に大きな影響を与えたとされる『翰林学士集』がある。唐・太宗の末年（六四八）頃までの詩を載せたもので、51首の詩が載せられている。しかし、この中には、今問題としている聖なる時代を典故として引き合いに出しつつ打ち消すような表現は見あたらない。

次に、『先秦漢魏晋南北朝詩』にもとづいて、懷風藻詩に見られた先の表現に似た表現を探ってみた。

・「誰論」……………8例

・「誰謂」……………39例

・「誰言」……………24例

・「誰云」……………24例

・「何論」……3例

・「何言」……46例

・「何須」……19例

・「何謂」……3例

・「何云」……2例

計168例のうち、この場には充分満ちているので、もはや典故の世界が不要であると語るものは、8首^⑧に過ぎない。

その中には神仙世界に関連するものがある。

桂棹梁棠船。

桂の棹 梁棠の船。

飄揚橫大川。

飄揚がりて大川に横たふ。

映巖沈水底。

映巖 水底に沈み、

激浪起雲辺。

激浪 雲辺に起つ。

廻岸高花発。

岸を廻りて高花発き、

春塘細柳懸。

春塘 細柳懸く。

陪歌承睿賞。

歌に陪して睿賞を承け、

接醴侍恩筵。

醴こさけを接ぎて恩筵に侍す。

誰云李与郭。

誰か云はん李と郭と。

独得似神仙。

独り神仙に似るを得たり。

(梁・庾肩吾「奉和泛舟漢水往万山应教詩」)

崑崙山にはえるという梁棠で出来た船に桂の棹をさし、風ひるがえる中漢水に船を浮かべる。周囲の巖は水底に沈んだように映り、激しい波は水面に映る雲とまがう。岸辺には春の花が咲き、堤では柳が垂れている。歌席に侍って太子のすぐれた恩恵を受け、酒を飲んでこの宴席に侍る。今さら李や郭の何を誰が口にしようか、もはやその必要などなく、一人神仙の趣を得た。

この詩では、太子の恩恵を受け、風物によって存分に神仙の

趣を得たことを、「李」「郭」を引き合いに出しながら語っている。

「郭」は、『文選』に「游仙詩」が載り、『神仙伝』にもその名の見える郭璞のことであろう。「李」については、『神仙伝』に

李八百・李阿・李仲甫・李意期・李常在・李少君・李修・李根の八名が挙がる。そのいづれであるか決めたいが、朝廷に仕

えたことからすれば、漢の武帝に仕えたとされる李少君のことかと思われる。巖と激しい流れの景は神仙世界のそれであり、その風趣がこの場には満ちているので、本当に神仙になった李

や郭のことなど不要であるというのである。

また、北周・庾信の「暮秋野興賦得傾壺酒詩」には、かつて劉伶は竹林で酒を飲み、嵇康は琴を弾こうとした(劉伶正捉酒。中散欲彈琴)という詩句に続けて、以下のようにある。

但使逢秋菊。

但だ秋菊に逢はしむれば、

何須就竹林。

何ぞ須むむ竹林に就くことを。

このように、すでに竹林の風趣はここに充分にあるというのである。

また、隋・孔徳紹の「南隱遊泉山詩」には、「どうして方士に尋ねる必要があるか、ここがまさに瀛洲である(何須問方士。此処即瀛洲)」とあり、懐風藻45詩「此地即方丈。誰説桃源實」・73詩「此地仙靈宅。何須姑射倫」への直接的影響を考えてよいであろう。

これらの詩の表現は、神仙世界が基本的に到達不可能な聖なる世界と見なされたことに起因するのである。こちら側の世界にありえないからこそ、このような表現は許されるのである。神仙世界の到達不可能性が、逆に今ここに充分満ちているとい

う讚めの表現を導いている。

このような、神仙世界を典拠としつつも不要を語るものは、今話題としている懐風藻詩にも最も多いものであった。また、後代の詩集にも見られる。

また中国詩には次のようなものも見られる。

定知丹甌出。 定めて知る 丹甌の出づることを。

何須銅雀鳴。 何ぞ須るむ 銅雀の鳴くことを。

「丹甌」とは豊年に出るとされる奇瑞で、「銅雀」とは鳳凰のことである。今ここには奇瑞が出るので、もはや鳳凰などという奇瑞は不要であるというのである。これは、北齊・魏収「喜雨詩」の末尾で、珠玉のような雨がついに降り（滴下如珠落）、気の調和が語られる（氣調登万里。年和欣百靈）。そこに続くのが先に引用した箇所で、ここでは、雨が降るということこそが最も大きな奇瑞であり、だからこそ鳳凰の不要を語るなのである。同じく「喜雨詩」では、宋・鮑照にも「堯の君たるに謝する無く、何ぞ用ゐむ柏皇を知ることを（無謝堯爲君。何用知柏皇）」とある。詩想は同様で、雨を得た今は、もはや聖天子たる堯が君主である必要もなく、上古の帝王たる柏皇（漢の武帝）も不要であるというのである。

また、このほかには、「何用白龍榮」（晋・楊羲）、「何用甘泉側」（齊・謝朓）、「何須銅雀台」（梁・吳均）があるが、これらの詩はそれぞれ「自足方寸裏」、「伊我歎既同」、「但令寸心是」と直前にある。いずれも、心の内側の問題として留保を付けている。その意味では、先に見た懐風藻詩の詠懷部とまったく同じ典故の用い方であるとは言い難い。

以上のように中国詩を概観してみると、次のことが明らかになる。

1、神仙世界を引き合いに出しつつその不要を語る形式がいくつも見られる。

2、雨を奇瑞と捉える特殊な状況下においては、今ここが古を超えた聖代であるとする表現がある。

3、典故を打ち消すにあたって、留保をつける。

ここから翻って懐風藻詩との関連を見れば、神仙世界の不要を述べる表現は、中国詩の影響下に作られたと推測される。しかし、宴席において、特に奇瑞もないままに聖天子の世の不要を語るものは懐風藻の特徴であると言える。

四

懐風藻侍宴詩の詠懷部には、「打ち消される典故」とも呼ぶべき独自の〈型〉が見られる。あえて引き合いに出しつつ、今ここには十分に満ちているためにもはや不要であると語るものである。「典故」という詩の〈型〉に則り、漢詩文の世界に所属していることを示しつつも、その世界の構造を破壊している。先に中国詩に見たように、神仙世界が到達不可能性を抱えるがゆえに、このような表現は可能であった。ことは、神仙関連にとどまらないであろう。聖天子の時代を、今ここが凌駕するといふ讚めの〈型〉の中にも同様に、到達不可能性の問題を見るべきである。中国における聖天子の時代のもつ聖性へ到達することが不可能であるからこそ、逆にこのような〈型〉を持ったのだ、というように。この逆説の中にこそ、「打ち消される典故」

はあるのではないか。それは典故という〈型〉の持つ強度を絶対的に信頼することではじめて可能になる。

漢詩文の世界の持つ普遍性や世界性とは、けつして均質な世界ではない。懐風藻の作る〈型〉のいびつさがそれを物語っている。列島という漢詩世界内の外延部において作られる詩というメディアの抱えた本質的な影なのである。

注(1) 呉哲男「懐風藻にみる『風景』の成立」(『懐風藻』笠間書院 二〇〇〇年)による。なお、波戸岡旭は、1天子讚徳、

2景物描写、3宴会描写、4詠懐に四分する(『侍宴詩考』『上代漢詩文と中国文学』笠間書院 一九八九年)。

(2) 林新注の指摘に拠る。

(3) 小島大系では「安(いづく)にか」と訓読するが、林新注などに拠る。

(4) 大系以前の諸注釈は「攀桂」を官吏登用試験としているが、小島大系は、『文選』招隱詩にもとづいて、文字どおり「山中での遊び」と解する。本稿で論じるように、同類の典故を踏まえて打ち消すという構造からも、大系説を支持する。

(5) 川合康三「うたげのうた」(『中国文学報』53) 一九九六年十月

(6) 注(5)の川合論文に同じ。

(7) 小島憲之『上代日本文学与中国文学 下』第六篇第一章(『搞書房』一九六五年)

(8) 梁・庾肩吾「奉和泛舟漢水往万山应教詩」、北周・庾信「暮秋野興賦得傾壺酒詩」、隋・孔德紹「南隱遊泉山詩」、北齊・魏收「喜雨詩」、宋・鮑照「喜雨詩」、晋・楊羲「許玉斧作」、齊・謝朓「和沈祭酒行園詩」、梁・吳均「贈別新林詩」

(9) 拙稿「恭仁京讚歌―福麻呂歌集歌と懐風藻詩との交流―」(『上代文学』第八十一号 平成十年十一月)

(10) 『文華秀麗集』には次のような詩句がある。

「何ぞ^{たが}勞^たかむ、整駕して瑤池に向かはむことを(何勞整駕向瑤池)」「11淳和天皇「秋日冷然院新林池」、「轡に登りて何ぞ近づかむ白雲の天(登轡何近白雲天)」「13朝野鹿取「秋山作」なお、この形式の淵源として、郭璞の「游仙詩」に、この形式ととれるものがある。(宇野直人・江原正士『漢詩を読む』平凡社 二〇一〇年)の指摘による。

(11) 金文京は「漢文」世界がそれぞれの言語の差異や変化を許容する世界であると指摘している。(『漢文と東アジア』岩波新書 二〇一〇年八月)